◆連載 いま留萌むかし 第三十四話

●黄金岬

太陽が西に傾きはじめると共に黄金色に染まり初め、水平線に沈んでからも名残おしそうに染まりつづける。岩膚に溶け込んだ人も黄金色のシルエットに輝く。これが日本一の夕日を誇る留萌黄金岬の夕景である。

黄金岬をつくっている岩礁はカンラン石玄武岩といって今から三百万年前に地球の内部から地表の弱い部分を通って溶岩が吹きだして固まった岩石である。上川の層雲峡の大函、小函や、天然記念物指定されている根室の車石と同じものである。この岩は柱状節理といって細長く割れる特徴をもっている。黄金岬で立岩と呼ばれている岩を見ると一目でわかる。留萌以北の海岸線にこのような堅い岩石の露出した磯は見当らない。

留萌市内には黄金岬と同じ時代に吹きだした玄武岩が藤山にもみられる。しかし、明確な柱状節理ではなく、枕状になっている。

江戸時代まではこの岬は断崖絶壁となっていたらしく、もっと海側に張り出していた。しかし、この岩石が堅いことから留萌の港をつくるときに防波堤のケーソンの中にこの石を詰めて使った。そのため、この岬が削り取られ、現在のような地形になったといわれる。

また、黄金岬という地名がいつごろから定着したのかもはっきりしていない。読み方も「こがねみさき」と読む人もいれば「おうごんみさき」と読む人もいて、一定していなかったらしい。

江戸時代の古い絵図や書物にはセムシ岬とか、ムルクタウシという地名がこの場所に記されている。セモシとは現在の瀬越のことであり、アイヌ後のサムーシットクから来ているという。サムは側、シットクは人間の肘のことであり、肘のように曲がっているところを指したらしい。今でも岬は海側に肘のように九十度に曲がっている。また、ムルクタウシとはムルは粟の糠、クタは崖、ウシはいつもあるところという意味である。アイヌの人たちが粟や稗を大量につくっていたという記録は留萌に残っていないが、粟の糠を大量に捨てて山のようになっていたところという意味らしい。松浦武四郎の「蝦夷漫画」という本の中に粟の糠を捨てたところにはヌサ（ごぜ弊のような神様を祭るもの）をたてて祭りしていたという。黄金岬は神様を祭る神聖な岬だったのかもしれない。

黄金岬の魅力であまり市民に知られていないものがある。黄金岬の冬の魅力である。

一つは冬の日本海の荒波である。インドのマドラス沖、スコットランドのウィック沖とならんで世界三大波涛とよばれている。

また、ケアラシという現象がある。これは冬の良く晴れてシバレタ朝、海面から水蒸気がたちのぼり幻想的な雰囲気をかもしだす。それも朝だけの現象なのである。そして毎日あるものでもない。一冬に数回あればよい。

これからこの冬の黄金岬の魅力も市民に味わってもらいたいと考えている。

●特集 歩いてつくろう自分の健康

平成元年10月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・株式会社 留萌新聞社

人の動き 男16,404（増38） ・女17,193（増31） ・合計33,597（増69） ・世帯数12,794（増24） 8月末現在